

双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」†

桑本 裕二*

秋田工業高等専門学校

宮本 律子**

秋田大学教育文化学部

本論は、2003年度から2004年度にかけて秋田大学教育文化学部で実施した日本事情の講義の実践報告である。当大学で実施している日本事情の講義はその性格上2種類に分けられているが、本論はそのうちの、日本文化に関する知識の授与を目的とする「日本事情Ⅲ、Ⅳ」について扱っている。授業は受講者の口頭発表形式を基本に進行し、テーマは自由とした。授業実施に際しては、日本文化の表面的な知識の授与よりは、日常生活に根ざした様々なカルチャーショックとも言えるストレスから生じる問題点に着目し、受講者の興味を引き出すよう努めた。日本文化の知識の会得には、まず留学生の出身国の文化的項目を手始めにし、それを基にして日本文化の同等物に対して思考を巡らすのが効果的であると考える、さらにそうして得た知識を自国の文化や他の国への文化に対してフィードバックするという、双方向的な文化理解を到達目標とした。

キーワード：日本事情、双方向型異文化理解、口頭発表、日本文化、心理的背景

1. はじめに

秋田大学の教養教育科目として、「日本事情Ⅰ～Ⅳ」が設けられている。これらの授業は本来的には外国人留学生対象の授業であるが、宮本担当の「日本事情Ⅰ、Ⅱ」では、1993年度以来、外国人留学生、日本人学生の区別なしに履修できるように変えた(宮本 1995: 1)。その後、様々な社会問題を扱ったテレビの報道番組や新聞記事などの紹介をもとにした討論主体の授業(宮本 1995)、複数の人文科学系教員のリレー形式による授業(宮本他 1998)¹⁾、地域を紹介するホームページの作成の実践(宮本・松岡 1999)など、様々な方法で授業が行われ、教育効果が高められてきた。「日本事情Ⅲ、Ⅳ」は、従

来、日本文化に関する知識の授与という内容を求めるものであるが、桑本が2003年度以降、この授業を担当している。本論は、2003年度から2004年度前期にかけて行った「日本事情Ⅲ、Ⅳ」の実践報告である。筆者らは、外国人留学生のいわゆる「日本文化理解」には、まず、外国人留学生の出身国文化の認識が必要で、これと日本の2国間の文化の異同を理解することが何より大切であると考え、留学生の自国の文化と、外国である日本の文化の相互理解を授業に求めた。授業は、受講者による日本文化に関わるテーマでの口頭発表をもとに、受講者全員による討論によってその話題を深めた。若干名の参加をみた日本人学生に対しては、主に外国人の視線で日本文化を眺めるというテーマを考えさせ、日本人としての異文化理解を求めた。

2. 日本事情の捉え方

—双方向的な異文化理解をめざして—

「日本事情」という授業科目名は昭和35年の留学

2005年1月24日受理

† "Nihonjijo" as a Goal to a Two-way Intercultural Comprehension

* Yuji KUWAMOTO, Akita National College of Technology, Akita

** Ritsuko MIYAMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

生教育制度の改正の時に初めて用いられ、以後、大学における留学生教育の1科目として発展してきた²⁾ (宮本 1995: p.1f.). それ以降、大学ごと、担当教員ごとにそれぞれの解釈があり、様々な試行錯誤を経て現在に至っている。大まかには、日本史や、正統的な「日本文化」についての講義主体から、より生活に密着した、日常生活のなかでの文化的背景、意識、反応などに注目した知識の教授へというふうに変遷してきている。かつては軽視されがちであった「背景知識」が、実際には留学生たちが留学中にかなり興味を持って知りたがる、あるいは知っていなければ困るという種類の事柄であることに気付かされることも多く、これを中心に教える意義は大きいといえる。

宮本(1995)は、「日本事情」について、2通りの教え方を示した。一つは日本語の学習を補う背景知識とみなし、言語教育の一環として教授するもの、もう一つは日本そのものの知識として従来の一般教育の一科目としての講義をするというものである(宮本 1995: 3)。秋田大学における留学生教育では、「日本事情」を、Ⅰ、ⅡとⅢ、Ⅳに分け、Ⅰ、Ⅱに対して前者の、Ⅲ、Ⅳに対して後者の理念を当てはめるものとして授業を実践してきた。

本論は、後者Ⅲ、Ⅳに関しての実践報告であるが、こちらの授業では「知識の授与」が授業目的の主体となる³⁾。本来的には日本文化に関する知識の授与が本授業に求められる。「正統的である」と思われるそのような知識とは、具体的には能や歌舞伎、生け花や茶道など、いわゆる日本の伝統文化であり、さらには建築や料理、年中行事など、古くから継承されてきた事柄にまつわることであり、これら種々雑多な知識に関して、包括的に豊富な知識を兼ね備えている一個人教員は、日本の民俗学研究者などを除けば、皆無に等しく、適切に知識の教授を行うのは極めて困難であるといっている。また、現状の留学生の日本語教育の一環としての位置づけから考えて、それ相応の専門教員を配置することには積極的な意味あいも薄い。また、外国人留学生は、必ずしももっぱら日本文化を学ぶのが目的ではなく、ましてや将来その専門家になるわけでもなく、工学や教育学を学ぶかたわらに語学教育の一部、あるいは周辺の知識として日本文化を身につけようとしているというのが実際の状況である⁴⁾。したがって、いわゆる「正統的な日本文化」の教授という点で考える

ならば、留学生の教育においてはさほど重きを置く必要はないと考える。そういった知識の多くは、通常の生活をしている日本人にとってでさえ、むしろ無知、無関心であることが多いというのが実状で、留学生たちの本当に身につけたい、あるいは教員が身につけさせたいと思うことはあまりにもかけ離れすぎているように思われる。

そうはいてもやはり、日本文化に対する知識の教授は必要なことである。「日本事情Ⅰ、Ⅱ」で理念としてかかげる、「背景知識の教授」という項目を、「日本事情Ⅲ、Ⅳ」においても盛り込み、文化そのものへの知識の教授と、それにまつわる背景知識の教授とをお互いに有機的に関連させる形で授業を展開してはどうかと考えた。もちろん、授業の根幹をなすのは、なにか特定の日本文化の項目に関する調査・研究・考察であり、また、それへの知識を深めることであるが、それにもまして注目したい(または、学生に注目させたい)ことは、それらの個別の知識が、現代の日本の社会の中でどのようにとらえられているのか、日本の人々がそれをどう意識しているのか、そしてなにより外国人の目から見てどのように感じられるのか、などについて考えることである。多くの外国人留学生たちは、留学中の日常生活の中で様々な日本の文化的側面に遭遇して、そのたびに驚き、不思議がり、不満をもち、あるいは楽しんでいる。これらの感情的側面は、いわゆる文化に対する「背景知識」、すなわち日本の風俗習慣や文化的背景に関わる意識や言語的、行動的反応などに対応したものであると思われるが、これらについて分かりやすくひも解くということは、文化理解にとって極めて重要なことであり、これらのかたわら具体的な文化的項目に対する疑問として対応させ、様々な考察を加えることは実に意義深いことである。

さらに、留学生たちが感じる日本文化に対する「ストレス」は、元々は留学生たちの出身国の文化に根ざしていることが予想できるが、留学生自らが、自国の文化をしっかりと理解し、またそれらの知識を他国の人に明瞭に説明できるだけの能力を持ち合わせることは、ひいては、外国文化である日本文化を正確に理解し、知識を深めることにつながると思われる。このように考えてくると、留学生にとっての日本文化理解は、まず出身国の文化理解を手始めにするべきで、それらの異文化間の異同についてしっかりと考察することで高めることができる。さらに、

そのようにして身につけた日本文化に関する様々な知識を留学後の自国に持ち帰り、その後の生活に生かすことができれば、それは大学における留学生教育の主要な効果の一つといい。

2003年度から2004年度にかけて桑本が担当して行った「日本事情Ⅲ、Ⅳ」には、日本人学生の受講者⁹⁾もいた。本授業は、本来的には留学生対象の授業であり、外国人向けの日本文化理解を基本に据えている。このような方針の授業の中での、日本人の学生に対しての「日本事情」の意義は、自国の文化を客観的に、外的な視野で眺めてほしいということであった。講義中には、当然、普段の講義ではあり得ないような比率で外国人がいたわけだが、そのような非日常的な環境の中であれば、普段すっかり浸っていて意識することすら稀有である「日本文化」というものをあらためて意識し、それに対して偏りのない考えをもてるようになり、客観的かつ新鮮な気持ちで様々な考察をすることが可能であるという期待もあった。このように、日本人学生に対しては、日本文化を外国へ向けて紹介することと、あえて日本の外に身を置いたと仮定した場合の「日本観」というものについて考えてほしいと思った。

外国人留学生にとっては自国の文化と日本文化の相互比較を基準とすることで、日本人学生にとっては、外国人へ向けて、またあえて国の外に身を置くことでその視点で日本を振り返るという意味で、いずれの場合も、双方向的な文化理解を目指すことができると考え、本授業での基本的な方針として据えることとした。留学生たちにとって、出身国は多様であり、自国以外の外国の事情をも理解することは自国の文化、日本の文化を相互に理解する上でも少なからぬ重要性をもつものであった。また、受講している日本人学生にとっても、異なる文化の複数の国を意識できる環境は、日本文化に対する見方の客観性をさらに強めるのに一役買っていたと思う。

3. 授業の方法

実践報告をするのは、2003年度から2004年度前期にかけて行った「日本事情Ⅲ、Ⅳ」である。前期開講が「日本事情Ⅲ」であり、後期開講が「日本事情Ⅳ」であるが、留学プログラムの開始・終了が通常9月～10月である学生が多いこともあり、ほとんどの場合、同一年度に連続してⅢとⅣを受講する学生

がほとんどいなかったことなどから実質的には同じ内容の授業を行った。

授業は、受講者の任意選択によるテーマでの口頭発表を行い、それに即して、教員から、また他の受講者からの質疑応答、そしてそれに基づく討論を行って全体的に内容を深めることで1回の授業としてまとめた。テーマを学生の自由に任せたのは、興味・目的など、様々な事情が考えられるからである。また、留学生には、1年の留学期間のプログラムである者、工学資源学部・教育文化学部の在籍学生である者、大学院進学をめざす研究生など、留学の目的により様々なタイプがあり、留学年数も様々なことから、日本語運用能力に個人差が大きく、自分でこなせる内容、長さ、質などを自分なりに考慮して発表に臨んでほしいという理由もある。実際、発表のために用意した、書かれた日本語を音読するだけでやっとというレベルから、図や表を示しながらその場で話したり、合間に質問に答えながら発表できるという学生まで様々であった。このように日本語力の様々な学生たちに対し、それぞれに即した評価を与えるためには自由テーマが適していると思われる。

日本人学生には、日本文化を外国人に紹介し、それを面白いと思ってもらう工夫や、あえて客観視するというコンセプトでテーマを選んでもらうよう指示した。

発表は、その時の受講人数にもよったが、1回90分の講義で2人から3人を割り当てた。1人分の持ち時間は約30分ということにし、その間で発表・または自らが司会進行役となって受講者に問題提起をしたり、質問を促したりと、自由に時間を使うように指示した。発表形式も自由とした。実際には、パソコンでパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを利用し、明瞭・的確にプレゼンテーションを行った学生がかなり多くいた。また、紙に印刷した図表を全員に配って説明した者もいて、その形式は様々であった。音源やビデオ・DVDなどの映像を使うことも可能性として示したが、1年半の開講期間でこれらの方法を使う者は現れなかった。

発表のテーマ選びは、特に来日間もない留学生には、いきなり自由に選ぶのはかなり難しいと思われるので、初回ガイダンスのあと、2回目の授業で発表の順番を決めつつ、とりあえず発表予定のテーマを公表してもらい、そのテーマ発表を授業中に参考

にしながら予定しているテーマを別のものに変更したり、テーマを決めかねている学生にはテーマ選定の参考にしたりという余地を与えた。このように、テーマ発表を受講者全員で公表し合うための授業を1回分設けたのは、選んだテーマについて調べるのにはどうしたらいいのか、何を用いて調べるべきか、また、調べて面白い結果が出そうか、期間内に調べることが可能か、などについての助言を与えるためでもある。また、ほとんど同じテーマのものはなるべく避けるようにし、また、関連した内容のものは同じ日に発表できるよう配慮した。

発表を終えた学生に対しては、発表、そのときの質疑応答の内容、教員からのコメントなどをもとに、論文の形でレポートの提出をもとめた。その際、特に日本語運用能力の低い学生は、口頭発表の発表原稿をそのままの体裁で、つまり話し言葉のまま書くようにする傾向が強いので、そのような場合には書き言葉の文章としてまとめるよう指示し、口頭発表と論文形式の文体の違いについて明確に指示するようにつとめた。そしてそのレポートを評価の対象とした。レポートは評価とコメントを付した後、受講者に返却した。

4. 授業の実践

4.0.

以下では2003年度前期から2004年度前期にかけての3期にわたる授業の実践について述べる。

4.1. 受講者数と受講者の国籍の内訳

3期の受講者数、および受講者の国籍の内訳は以下のとおりである。

2003年度前期「日本事情Ⅲ」

受講者数	21名
韓国	9名
中国	5名
マレーシア	4名
オーストラリア	1名
イラン	1名
日本	1名

2003年度後期「日本事情Ⅳ」

受講者数	27名
------	-----

韓国	6名
中国	7名
マレーシア	4名
オーストラリア	1名
イラン	1名
日本	8名

2004年度前期「日本事情Ⅲ」

受講者数	21名
韓国	10名
中国	6名
マレーシア	1名
アメリカ合衆国	1名
ブラジル	1名
日本	2名

受講者数はいずれも20人台で一定していた。出身国は、韓国、中国が合わせて常に半数近く、またはそれ以上で、それについてマレーシア、オーストラリア、アメリカ合衆国などとなった。オーストラリア・アメリカ合衆国などは、秋田大学と姉妹関係にある大学⁶⁾から定期的に留学生を受け入れているため必ず1、2人は留学生がいて、ほとんどの場合は本授業を受講することになる。これら3期の間で特徴的だったのは、イラン、ブラジルからの留学生がいたことで、大勢いる東アジア人や馴染みのある国からの欧米人とは異なる感覚をもって、ことあるごとにその違いに気付かされて、そのたび新鮮な気持ちにさせられた。

4.2. 授業の展開 - 発表のテーマ

口頭発表のテーマは、およそ次の3種類に分類できる。

- A. 日本文化そのものを中心にしたもの
- B. 出身国の文化を中心にしたもの
- C. 日本人の心理的背景を中心にしたもの

Aは、いわば伝統的な日本文化に関する「知識授与」に結びつくものである。多くの留学生にとっては、初期段階で興味をもつものでもあり、この種の発表を通して正統的な日本文化知識授与が達成できたという感をもった。Bは、まず、発表者の視点を自国の文化に据えるところから始め、その当該国

の文化に関する項目を、他文化である日本において、あるいはその他の国からの留学生に対して、明快に、興味深く紹介することを求めた。そして、そのような文化的項目に関して、どのような点が日本文化の中で理解してもらえるのか、ということに着目し、発展的には日本文化の中の等価なものとの比較を行い、それらについての考察、自分なりの分析を求めた。Cに関しては、この授業で最も注目していたことであるが、留学生たちが留学中の日常生活のなかで体験する様々な言語的・行動的反応に対する不満や疑問などを出発点に考えたものである⁷⁾。平たくいえば「カルチャーショック」ということになるだろうが、このカルチャーショックの根本原因について、なにか具体的なテーマに即して熟考し、分析することで異文化である日本文化の理解へつながるとの期待感もあった。

受講者に対して全般的には、自らの口頭発表に関する研究をもとにし、また、他の受講者の（特に他国からの留学生である場合には）発表を聞くことで、日本文化だけではない異文化間の相互理解を到達目標とした。

実際に2003年度前期から2004年度前期にかけて行った口頭発表のテーマを上記のA～Cに分類すると、次のようになる。発表は全部で69件である。それぞれの発表項目の（ ）内には、発表者の国籍、性別を示す。

A. 日本文化そのものを中心にしたもの（24件）

- ・桜と日本の伝統（マレーシア・女）
- ・通り魔事件と日本の社会（韓国・女）
- ・納豆と日本の食文化（韓国・女）
- ・日本の女子高生と風俗文化（韓国・女）
- ・日本の着物について（マレーシア・男）
- ・神奈川県を外国人留学生に知ってもらおう（日本・男）
- ・なまはげと日本の伝統芸能（中国・男）
- ・侍と日本人（マレーシア・女）
- ・歌舞伎について（中国・女）
- ・日本におけるスポーツの進歩（中国・男）
- ・観光地京都の魅力（オーストラリア・男）
- ・日本の地震（中国・男）
- ・自衛隊（韓国・男）
- ・日本の正月の過ごし方（日本・男）

- ・日本人のノーベル賞受賞（マレーシア・男）
- ・日本におけるキリスト教の普及（韓国・女）
- ・和食と食文化（中国・男）
- ・秋田の常識・非常識（日本・女）
- ・バレンタインデーと日本人（日本・女）
- ・日本の国技、相撲について（中国・男）
- ・日本のマンガ文化（中国・女）
- ・茶道について（韓国・女）
- ・『千と千尋の神隠し』と日本文化（中国・女）
- ・日本の電化製品の今昔（日本・男）

B. 出身国の文化を中心にしたもの、日本文化と比較したものなど（29件）

- ・韓国と日本のお正月（韓国・女）
- ・韓国の伝統衣装（韓国・女）
- ・漬けものの日韓比較（韓国・女）
- ・餅とトック（日韓比較）（韓国・女）
- ・日本とマレーシアの結婚式（マレーシア・女）
- ・外国人の知らない韓国の穴場観光地（韓国・女）
- ・四季の移り変わりー日本とマレーシアー（マレーシア・女）
- ・イスラム教ーその宗教性とテロリズムー（イラン・女）
- ・日本と他国の文化比較ー2, 3の点に焦点をあててー（日本・男）
- ・日本と韓国の温泉文化（韓国・女）
- ・中国の方言（中国・男）
- ・中国の観光地の紹介（中国・女）
- ・マレーシアと日本の文化ー服装と遊びー（マレーシア・女）
- ・日本と海外の正月の過ごし方（日本・男）
- ・日韓の交通事情（韓国・女）
- ・札幌とハルピンの比較（中国・女）
- ・日本と韓国の家屋（韓国・女）
- ・日韓の文化比較（韓国・男）
- ・マレーシアのお祭り（マレーシア・女）
- ・マレーシアと日本におけるCM産業（マレーシア・男）
- ・日本と韓国のラーメン文化（韓国・女）
- ・日本と韓国の年中行事（韓国・女）
- ・日本と中国の神社仏閣のありかた（中国・男）
- ・韓国と日本のドラマ（韓国・男）
- ・プロサッカーの韓日の違い（韓国・男）

- ・韓国と日本の結婚のしきたり（韓国・女）
- ・日本のキムチ産業（韓国・女）
- ・韓国のハンbok（韓服）と日本の着物（韓国・女）
- ・日本とブラジルの観光地（ブラジル・男）

C. 日本人の心理的背景を中心にしたもの（16件）

- ・日本の外国人差別について（イラン・女）
- ・日本人の外国人観（中国・男）
- ・日本と他国の宗教観の違い（日本・男）
- ・誕生日とそのお祝い（日本・男）
- ・日本の少年犯罪について（日本・女）
- ・外国人から見た日本の若者（韓国・男）
- ・中国と日本の恋愛観について（中国・女）
- ・日本文化に関する私感（中国・女）
- ・オーストラリア人の日本観（オーストラリア・男）
- ・日本の不思議なことの発見（中国・男）
- ・日韓の性意識の違い（韓国・男）
- ・日本と韓国のアルバイト事情（韓国・女）
- ・中国と日本の食文化における味付け（中国・男）
- ・日本のお笑い文化（アメリカ合衆国・男）
- ・自殺について（中国・男）
- ・外国人がイメージする日本（日本・男）

5. 実践例に基づく考察

5.0.

実際の発表例をいくつか取りあげて、前節の分類A～Cのそれぞれの成果について述べる。

5.1. 分類Aの発表について

基本的には伝統的な日本文化の知識や分析の紹介となった。その典型的だったのは「日本の着物について」「茶道について」「歌舞伎について」などである。このような話題は多くの留学生が興味をいだく項目でもあり、そのような知識が増えるのは喜ばしいことでもあったが、ある伝統芸能の技術・形式に関するだけの報告もあって、文化とその周辺にある背景、日本人の精神的関わりなどに関して感じられることのない発表がめだつた。後述するが、情報収集にインターネットを利用する場合、調査の段階でウェブページの情報に翻弄されすぎ、本人の理解の量を超える情報を集めて、何となくつなぎ合わせているという発表もあった。集めた情報を自分の力

量に合わせて分析・処理するというのも大切な技術であり、今後にわたって学生には身につけてほしいことのひとつである。

伝統的な日本文化に対するテーマがみられる一方で、「日本のマンガ文化」「日本におけるスポーツの進歩」など、最近のメディアに関するものへの憧れや興味を感じられた。また、「自衛隊」や「通り魔事件と日本の社会」など、外国文化からは不可解な社会制度、社会現象に対する鋭い指摘などは斬新であった。

印象的な発表例としては以下のものを挙げる事ができる。

発表例1. 「日本におけるキリスト教の普及」

日本人の宗教観全体に関する意見をまとめたものであるが、西洋文化の一つであるキリスト教が、韓国ではかなり普及した一方で日本ではそれほど普及していない。その理由を日本人の宗教観のなさ、無宗教主義的でありすぎるという指摘とともに問題視した。他の受講者からは、はたして日本人は本当に無宗教なのか、という問いかけもあって本質的なところを深く考えさせられる機会となった。

発表例2. 「『千と千尋の神隠し』と日本文化」

日本から世界的に脚光を浴び始めたアニメーションの代表的な表題作を外国人の視点で分析、作品の中にある日本の文化的側面を様々に論じた発表であった。子供の娯楽という立場から脱却し、国際的にアニメの芸術性が認められる昨今、日本文化にふれる可能性も見いだされた。

発表例3. 「日本の女子高生と風俗文化」

批評的に扱われることの多い現代日本の代表的な風俗現象である。高校生の制服など、若者の服装に関する乱れを指摘し、そのおかしさや、背景に考えられる文化的側面について外国人の視点で様々に分析していた。

5.2. 分類Bの発表について

この分類の発表は、本授業の基本的方針としてかかげる「双方向型異文化理解」の一環として、自国の文化の探求から考察を深め、異文化である日本で適切に紹介し理解してもらおう、また日本文化の同等もしくは等価のものと比較して考察を深めるという

ことをねらったものであった。「漬けものの日韓比較」「日本とマレーシアの結婚式」「日本と韓国の年中行事」などは、写真や図表を用いた非常にわかりやすい文化比較だったと思うが、「マレーシアのお祭り」「中国の方言」「中国の観光地の紹介」などのように、単に自国文化に関する項目の考察に終始しているものの場合、やはり「日本事情」という授業の名称から考えてもかなりのずれがあるように感じられた。このような発表を行った（このようなテーマを選ぶしかなかった）学生は、大抵日本語の能力が初級段階であることが多かったので、このような学生に対しては、せめて正しく日本語が話せるように、レポートに日本語が正確に書けるように、という視点で評価を行うことにした。同じ自国文化に関するものであっても、「外国人の知らない韓国の穴場観光地」「イスラム教—その宗教性とテロリズム—」などは、日本での観光地のあり方や、宗教観に関して、ひるがえって考察が及ぶものであったので十分に異文化理解、ひいては日本文化に対して十分に働きかけるものであった。

その他、印象に残った発表として次のものを挙げることができる。

発表例 4. 「日本と韓国のラーメン文化」

日本と韓国のインスタントラーメンについて、歴史的な考察から入り、日本ではカップラーメン中心であるのに対して韓国では袋入りインスタントメンである場合が多いのはなぜかについて分析し、さらに通常のラーメンの、しょうゆ、みそ、塩、豚骨味にそれぞれが韓国人の味覚に合うかどうかということと、ラーメン店が韓国において普及しないことには相関があると指摘した。日本の「キムチラーメン」などに対する韓国人としての違和感などは外国人ならではの感性であると感じられた。

発表例 5. 「日本と韓国の温泉文化」

単なる温泉紹介にととまらず、温泉療法や歓楽など、目的別の楽しみ方についての日韓比較が紹介してあった。特に自国の韓国のものに対するよりは、日本の伝統的な温泉旅館に対して、建物や部屋の構造のみならず、料理のふるまいかた、仲居の存在、また、混浴風呂に関する意識など、あらゆる方面からの考察があった。

発表例 6. 「韓国と日本のドラマ」

当年（2004年）ブームとなった韓国ドラマや、韓国で最近解禁された日本映画、ドラマについて、日韓双方の立場の違いからせまり、特にどのような内容がそれぞれの国で受け入れられ、それによって人気が出るのかに関する考察がなされていた。ちょうど日本でも「冬のソナタ」など韓国ドラマが流行っていた時期でもあり、話題性もあって分かりやすい文化比較であった。

5.3. 分類 C の発表について

この分類に属するテーマについては、当初より授業担当者側が最も興味をもって臨んだことの一つである。宮本（1995）でも指摘した、「背景知識の教授」に関することだからである。各授業において、初回のガイダンスの時には、何か困ったこと、いやな思いをしたこと、不思議に思っていることなどないか、また、そう言う事柄を是非扱って発表テーマに選んでほしい、ということを奨励していた。実際には4節の一覧表の通りであるが、「日本人の外国人観」「日本文化に関する私感」「オーストラリア人の日本観」など、視点こそ違え、包括的な日本文化私感を展開させたものがあり、また一方、「日本と他国の宗教観の違い」「日本の少年犯罪について」など具体的な項目に関する考察もあった。全体的にみて、実際の留学中の経験に基づいているため、非常に主張が鮮明であるという印象を受けた。発表によっては質の高いものが数多く見られた。

印象に残った発表を挙げる。

発表例 7. 「日本の外国人差別について」

発表者は小学校高学年より日本に住み、日本の小・中・高校へも通った経験をもち、外国人としての差別に苦しんできたが、そのなかで、宗教的な偏見や、人種の違い、服装や習慣の違いに関して日本人、または日本文化が極端にそれらを受け入れがたい環境であるという分析をした。結論としては、理解のある日本人に恵まれ、自分からも日本文化を受け入れるようになったという内容だったが、すこし感情的かつ悲観的な色合いが濃すぎたようだった。

発表例 8. 「日韓の性意識の違い」

発表の主題になったのは、テレビや週刊誌における、日本での性描写の反乱に対する警鐘であるが、

テレビで若年層が視聴する時間帯であっても猥褻と
感じられる表現があったり、書籍物においても同様の
無配慮が横行していることに対して考察をめぐら
した後、日本人と外国人の間での性交渉や公共での
性描写、性的な言動に関する意識調査を行って、日
本人と外国人の性意識の差異を明示した。

発表例 9. 「日本と韓国のアルバイト事情」

発表者の留学中におけるアルバイトで経験した出
身国の韓国との違いに言及し、それぞれの立場の違
いを明らかに分析した。日韓間では物価に対する時
給の多寡があることや、本来勉学をする大学生が金
銭を稼ぐことに対する意識の違い、雇う側にとって
のアルバイトに任せる責任の重さの違いなど、興
味深い指摘があった。店がアルバイトを雇うとい
うことに対する社会的・経済的構造上の言及から、
一アルバイトとしての意識の違いなど、異なる視
点からの様々な考察は興味を引いた。

5.4. 発表全体を通して言えること

発表形式、発表内容は発表者により様々であった
が、一貫してインターネットのウェブページからの
参照が多く、ひどい場合には資料そのもののコピー
の寄せ集めと思われる発表原稿もあり、あまりに安
易であると感じられた。参考資料としては、インター
ネットの利用は大いに推奨されるべきであるが、必
要なものを適宜利用し、自分で考察してまとめる
という作業をおろそかにしてほしくないと思われた。
さらにいえば、インターネットの利用に比して書籍
資料の参照、閲覧、引用などがほとんど見られな
かったことは残念で、もっと基本的な資料収集とい
うことを指導していかなければならないと思った。

評価の対象としてレポートの提出を要求したが、
基本的なレポートの書き方について随分不備が感じ
られた。段落の書き方、句読点の統一（〔、。〕か
〔. 〕かの選択）など、初歩的と思われる作文法に
ついては未熟さが感じられ、このようなレポート作
成の指導に関しては基本から見直す必要があると思
われる。

また、本授業においては、口頭発表を主体にした
が、口頭発表の仕方については、話題の力点の置き
方に強弱をつけて中心的な話題を強調することや、
話す目線や姿勢、話す早さなど、書く表現にはない
注意点がある。本学において、話す言語運用能力を

高める目的の授業があまり多く開設されていないの
で、本授業は日本語学習者にとっては話す能力を高
める役割もあった。また、日本人学生にとってもプ
レゼンテーションの方法について学ぶ機会を提供す
ることになり、彼らに対しては、卒業論文の口頭発
表会などを中心とする将来の口頭発表の場で方法論
が生かせることが期待できるものとなった。

6. おわりにー今後の展望ー

以上述べてきたように、1年半にわたって行って
きた「日本事情」は、主に双方向的異文化理解とい
うことを主眼に据えて実践してきた。授業では、調
査した内容についてテーマ発表を実際に行ったり、
他の発表者の口頭発表を聞いたりすることで、自国
の文化、日本の文化、さらには第3の外国の文化に
ついて双方向的、あるいは多方向的に思考を巡らす
機会を、学生たちに与えることができたと思う。大
切なことは、この授業を通して考えたことが、大学
で本来学んでいることへ何らかの形で有効利用され
ることである。本授業を受講した学生が、考えた内
容を留学後の生活に効果的に生かしていくことを強
く望んでいる。

授業担当者としては、自由で多様なテーマに対応
するために、一応の基礎的な文化的知識を準備して
おくことはきわめて困難なことであったが、やりが
いのあることでもあった。特に時代とともに急速に
変動する文化事情に対しても、柔軟に敏速に対応し
ていくことが今後求められていくと思う。

注

- 1) 複数教員によるリレー式の講義の実践例として
は、佐々木（1990）、細川（1990）などが具体的
である。
- 2) 留学生教育制度の歴史と現状については水谷
（1990）を参照。
- 3) 秋田大学における「日本事情Ⅲ、Ⅳ」の過去の
実践例として宮本・松岡（1999: 66ff.）で報告し
ている。
- 4) 宮本・松岡（1999: 66）参照。
- 5) 2003年度前期受講者21名中1名、同後期27名中
8名、2004年度前期21名中2名。
- 6) 秋田大学では大学間の国際交流協定校として、
オーストラリアのグリフィス大学、アメリカ合衆

国のセント・クラウド州立大学, 韓国のハンバット大学, 中国の黒龍江大学などと協定を結んでおり, これらの諸国からの留学生を積極的に受け入れている。留学生の出身国における割合がこれらの国で高いのはこのためである。

7) 奥西 (1990: 43f.) は日本事情で取り扱うべき内容として,

(1)日本人との意思疎通の円滑化に必要と思われる知識

(2)学習者の好奇心・疑問に対する応答

(3)言語の背景としての文化の理解

の3項目を掲げている。筆者が分類Cで扱いたいと思ったのはこれらの項目にはほぼ合致する。

参考文献

奥西俊介 (1990) 「日本事情の授業・3-日本事情から日本文化へ, そして…」『言語』第19巻第10号, 42-47.

佐々木瑞枝 (1990) 「日本事情の授業・1-日本人学生を交えて」『言語』第19巻第10号, 28-34.

細川英雄 (1990) 「日本事情の授業・2-教養部スタッフと協力して」『言語』第19巻第10号, 35-39.

水谷修 (1990) 「日本事情とは何か」『言語』第19巻第10号, 22-27.

宮本律子 (1995) 「「日本事情」をどう教えるか-秋田大学における実践報告 (1)-」『秋田大学教育学部教育工学研究報告』第17号, 1-11.

宮本律子・村上東・日高水穂・中村裕・本間恵美子・小林綏枝 (1998) 「「日本事情」をどう教えるか 秋田大学における実践報告 (2)-リレー式による日本事情講義の試み-」『秋田大学総合基礎教育研究紀要』第5集, 73-86.

宮本律子・松岡洋子 (1999) 「「日本事情」のオリエンテーション教育としての意義-複数の授業形態の実践を通じて-」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第21号, 63-71.

Summary

This is a case study of Japanese Affairs courses held at Akita University in 2003 and 2004. The courses are divided into two parts: one is Japanese Affairs I and II aiming at giving students skills for intercultural communication, and the other is Japanese Affairs III and IV for 'basic' knowledge of Japanese culture. The latter is dealt with in this paper. This class mainly consists of oral presentations on Japanese culture. We didn't focus on superficial cultural phenomena but on so-called 'culture shocks' which most foreign students experience. Through 'culture shocks,' they are able to find various kinds of cultural, and especially psychological background on Japan. Furthermore, we think that the most effective method is to start from consideration of cultural items of their homeland itself, and then, the counterparts of Japan. Our ultimate aim is two-way intercultural comprehension between students' own country and Japan.

Key Words : Japanese Affairs, Two-way Intercultural Comprehension, Oral presentation, Japanese Culture, Psychological Background

(Received January 24, 2004)